

インテグラル思想研究会
2006年3月19日（日曜日）
インテグラル理論にもとづいた人間集団の調査基準
鈴木 規夫 Ph. D. (Norio001@nifty.com)

はじめに

今日、インテグラル思想は——Integral Institute 等の関連組織の活動に象徴されるように——自らの実践思想としての特徴を積極的に表現しはじめようとしている。インテグラル思想を理解するとは、(少なくとも) VL 段階の認知構造にもとづいて、同時代のダイナミズムの渦中に積極的に参加することをとおして、自己を再発見しつづけていく必要性を認識することであるといえる。その意味で、インテグラル・コミュニティの成熟が、多数の関係者を社会における実践へと向かわせていることは、当然のことであるといえるだろう。また、それは、インテグラル・コミュニティが、実際に、インテグラル思想のこれからの展開に必要な人材を育成・吸引していることの証として評価できることであるといえるだろう。しかし、また、このように思想運動が新局面を迎えるときには、関係者がこれまでに自己のものとして意識することのなかった問題・課題と真摯に対峙することを要求されるようになる。

インテグラル思想は、トランスパーソナル思想を基盤として発祥するものであるために、これまでは、どうしても1人称領域の研究・実践活動を強調することになりがちであった。また、これまで2人称・3人称の領域を対象として活動してきた研究者・実践者は、あくまでも部外者として共同体に介入することが一般的で、実際に共同体の運営者として継続的・長期的にその成長・治癒に携えることは稀であった。こうした理由のために、インテグラル・コミュニティは、継続的・長期的な共同体運営の経験にもとづいた2人称・3人称の領域に適応する智慧を蓄積・継承するための方法論を構築しえていない。今後、組織的な要素をもつ思想運動として展開していくうえで、こうした弱点を克服していくために積極的な作業をしていくことは非常に重要になるだろう。そして、こうした状況において、インテグラル思想の研究者・実践者が、あらためて、自らの問題として、健全な共同体を運営するうえで留意すべき重要事項について検討をすることは必須となるといえるだろう。

Bill Torbert (2004) の指摘するように、どれほど高度に成熟した個人により構成されていようとも、組織は、組織として独自の成長過程を基礎段階から始めなければならない(例: 構成員全員が VL 段階に到達していたとしても、組織は基礎段階からその発展を始めなければならない)。そうした過程は、組織の構成員が、日常の継続的な相互作用をとおして、組織の文化 (“probability waves”) を構築していく作業といえるものである。個人の瞬間・瞬間における行為が組織体の習慣として継承されることを認識することは、構成員に自己の行動の体現することになる意味を長期的視座から把握するための文脈を提供する。ここ

では、そうした視座からインテグラル・コミュニティーの健全な発展のために参画するうえで重要となる留意事項について確認をする。

重要概念

- * Translation : 存在する構造の範囲内で可能な成長・治癒を達成すること
- * Transformation : 存在する構造を段階的に変容すること

- * Legitimacy : Translation をとおして実現された健康の実現度
- * Authenticity : Transformation をとおして実現された構造の成熟度

インテグラル理論にもとづいた人間集団の調査と成長促進の方法

* 構造分析 (Structural Analysis・Determination of Authenticity) (Outside of UL & LL)

構造分析とは、共同体の構成員の行動 (surface structures) の分析をとおして共同体の構造 (deep structure) を把握することを意味する。構造を測定するための方法としては、例えば、Jane LoevingerやRobert Keganの創出した測定方法がある。ここで重要なことは、必ずしも、共同体の構成員の個人・個人の発達構造を把握することではなく、むしろ、共同体を共同体として定義する価値体系・信念体系を検討することである。¹⁾ ここにおいてとりわけ有用となるのが、共同体の構成員として認知されるために個人が内化することを要求される重要事項 (行動体系・信念体系・価値体系) に注目することである。共同体は、これらを構成員に内化してもらうことにより、自らを組織化することができるのである (共同体内部に階層が存在する場合、それぞれの階層の検証が必要となる)。

- 文献解釈 (Hermeneutical reading of texts) : 共同体の発達構造を効果的に調査するための計画を構築するためには、共同体の文献 (共同体において「重要文献」として見なされている文献) を組織的に解釈することが助けになる。共同体が構成員のなかに垂直的な成長を醸成することを志向するものである場合には、これらの文献に掲載されている高度の成長段階の特徴とそこに到達するまでの道程についての描写に注目をする必要がある。
- 直接的調査 (Direct Investigation) : 垂直的な成長を実現するための実践 (修行) に取り組んでいる共同体の構成員の発達構造の調査の実施。

留意すべきことは、個人の発達段階を測定することにより、現実の全容を把握できたと思いきわることが非常に危険であるということである。個人は常に関係性のなかに存在しているのであり、個人の「健康度」を把握するためには、個人をとりまく共同体の健康度を検討する必要があるのである。

* 機能分析 (Functional Analysis・Determination of Legitimacy)

構造分析の終了後、共同体の内的・外的な適応度を調査することになる。

- 内的適応 (Content Legitimacy/Illegitimacy) : 共同体の構成員による行動がどのように共同体の安定性と統合性の維持に貢献しているか (Inside of LL & LR)
- 外的適応 (Context Legitimacy/Illegitimacy) : 共同体の構成員による行動がどのように並存する共同体と関係の安定と統合に貢献しているか (外部との境界において発生する現象に注目をする) (Outside of LL & LR)

ここで留意すべきことは、「構造分析」と「機能分析」の両方を実施することの重要性である。共同体と共同体の関係について検討をするうえで、「機能分析」の視点から表層的な事項に注目するだけでなく、「構造分析」を実施することを

とおしてはじめて把握される段階的差異にも注目することが必要となるのである。

* 個人の内的意味世界の解釈 (Hermeneutical Moment) (Inside of UL)

上記の調査を前提として、対話をとおして、構成員の内的意味世界を解釈する。

* 個人の垂直的な成長衝動の解発 (Emancipatory Moments) (Inside of UL)

普通、**translation**をとおして、それまで抑圧されていた心的エネルギーが自己のなかに統合されることにより、段階的成長を志向するダイナミズムへと変容する。ここでは、また、そうしたダイナミズムの建設的な実現を援助するための変容の実践が必要となる。

宗教的共同体における特有の問題について

* 権威 (Authority)

良性の権威の条件として、下記のものあげられる (例：義務教育)。

- 成長をもたらすものであること (“actualization hierarchy” rather than “domination hierarchy”)
- ある段階 (期間) における一時的なものであること (phase-temporary・phase-specific)

トレーニング期間が終了するとき (もしくは教師と生徒のあいだの能力差が消失するとき)、教師の権威は解消・減少することになる。実際、こうした種類の権威は、人間関係 (師弟関係) をとおして成長というものが志向されるときには必ず必要とされるものであることが広範に認識されている。² 逆に、上記の条件をみたさない権威は悪性の権威である可能性が高いといえるだろう。問題を内包した宗教的共同体を特徴づける 悪性の権威の条件としては下記のものあげられる。

- 合理性段階以前の段階への退行を促進する (しばしば、内的論理への盲従・肉体的衝動への耽溺・太古的な自己犠牲へと結実する)
- (臨時的な指導者ではなく) 恒常的な指導者により率いられる (しばしば、共同体の内的ダイナミクスにより、ひとりの個人が恒常的な指導者に祭りあげられる)
- 共同体の構成員の正当性があるひとりの個人により保証される (構成員が自らが共同体の正当な構成員であると感じることができるための最終判断が権威者によりなされる)

* 宗教共同体の判断のマトリクス

MONISTIC

	TECHNICAL	CHARISMATIC
One-Level	est Scientology Circle of God	Charles Manson Family Messiah's World Crusade Om Cult
Two-Levels	Vedanta Hinduism Integral Yoga Zen Buddhism	Meher Baba Muktananda Bubba (Da) Free John

DUALISTIC

	TECHNICAL	CHARISMATIC
One-Level	Positive Thinking Robert Schuller Church of Hakeem	Unification Church (Moonies) People's Church (Jonestown) Synanon
Two-Levels	Catholic Charismatic Renewal Group Neo-Pentacostal Groups	Jesus Movement Christ Commune Christian Liberation Front

- “Monistic”な共同体は、全ての人間が窮極的には「神」と一であることを信じる（個人・個人がいかなる信念を抱いていようとも）
- “Dualistic”な共同体は、共同体に所属する人間だけが救済されることを信じる
- “One-Level”な宗教は、現象世界を救済の場所として認識する
- “Two -Level”な宗教は、時空をこえた領域を救済の場所として認識する
- “Charismatic”な宗教は、共同体の指導者の人格を基盤にして展開する
- “Technical”な宗教は、客観的な技術・実践（伝統）を基盤にして展開する

Dick Anthony & Tom Robbins によれば、（例外はあるが）傾向として下記のことが観察されるという。

- “Monistic”な共同体よりも“Dualistic”な共同体のほうが問題を内包する傾向にある。“Dualistic”な共同体は、必然的に先鋭的な内部対外部という対立軸を構築することをおして、構成員に共同体への過重な忠誠を強要し、外部との乖離を促進する。“Monistic”な共同体は、この瞬間における諸々の差異の存在を認識しながらも、あらゆる人間の窮極的な同一性を強調する。

● “Two-Level”の宗教よりも“One-Level”の宗教のほうが問題を内包する傾向にある。“One-Level”の宗教は、現存する段階（現実）を最高度のものとして解釈することに腐心するだけで（たとえ、それがいかに低劣なものであろうとも）、垂直的成長の可能性を無視する傾向にある。“Two-Level”の宗教は、現存の段階を最高のもので拒否することをとおして、構造的成長の可能性・必要性を認識する。

● “Technical”な宗教よりも“Charismatic”な宗教のほうが問題を内包する傾向にある。“Charismatic”な宗教は、ある個人の権威に依存するかたちで展開するために、その個人が真に優秀でない場合には、共同体は容易に悪循環に陥ることになる。³ “Technical”な宗教においては、客観的な技術・実践（伝統）を基盤として展開することをとおして、権威者の特異な性格（気まぐれ）による悪影響を減少することが可能になる。

最悪の組合せは Dualistic・One-Level・Charismatic な共同体ということができる。そして、最良の組合せは Monistic・Two-Level・Technical な共同体ということができる。

真の変容を志向する共同体の特徴として、下記のもものがあげられる。

1. トランスパーソナル段階への成長（プリパーソナル段階への退行ではなく）を志向するものであること。これは、意図的・継続的な実践を必要とする。また、こうした実践は、普通、（食生活・性生活等についての）倫理的な取り組みを内包する。実際に持続的・構造的な変容を実現することは非常に困難であることが認識されている。
2. 伝統の基盤のうえに自らの正当性を確立していること。伝統の存在は、権威的な個人の支配や歪曲に対する最良の対応策である。
3. 権威の意義が成長段階における臨時的なものであること（上記参照）。
4. 完全な指導者により先導されていないこと。完全性はこの現象世界には存在しえない。共同体の構成員により指導者が完全な存在として理想化（偶像化）されていることは、その共同体が「本質」（essence）と「存在」（existence）の混同を解決する機能を有していないことを示唆する。
5. 世界の救済を志向するものではないこと。自己と自己の所属する共同体を世界救済の責任を負う存在として見なすことは、（他者とは差異化されたものとしての）自己を特別視しようとする傲慢の表現である可能性がある。また、こうした選民意識は、自己を絶対的な解決法（the way）を持つものとして見なし、また、それを実行するためにはあらゆる犠牲を必要悪として見なす、自己中心性を増幅することになる。

参考文献

- 林 道義 (1999) 「特別講義 ユングの心的エネルギー論」 Available at <http://www007.upp.so-net.ne.jp/rindou/jung5-3.html>
- Allan Combs (1995/2002). *The radiance of being: Understanding the grand integral vision—Living the integral life* (Second Edition). St. Paul, Minnesota: Paragon House.
- Riane Eisler (1987/1995). *The chalice and the blade: Our history, our future*. San Francisco: HarperSanFrancisco.
- Robert Jay Lifton (1999). *Destroying the world to save it: Aum Shinrikyō, apocalyptic violence, and the new global terrorism*. New York: Henry Holt.
- Bill Torbert and Associates (2004). *Action inquiry: The secret of timely and transforming leadership*. San Francisco: Berrett-Koehler Publishers.
- Ken Wilber (1983/2005). *A sociable god: Toward a new understanding of religion*. Boston: Shambhala.
- Ken Wilber (1983/2001). *Eye to eye: The quest for the new paradigm (Revised edition)*. Boston: Shambhala.

 文末注

- ¹ しかし、いうまでもなく、共同体の重要構成員の発達段階の把握は重要である。
 - ² 師弟関係とは、ErosとAgapeの相互作用を基盤として可能となるものである。
 - ³ また、“Charismatic”な宗教共同体に特異な人間関係上のダイナミクスは指導者の自我肥大を助長する悪性の特徴を有していることを認識する必要がある。
- Robert Jay Lifton (1999) の指摘するように、“Charismatic”な宗教共同体の問題は、指導者のみにあるのではなく、指導者と構成員の関係のなかに発生するのである。